

内視鏡下鼻内手術を中心とした 鼻副鼻腔悪性腫瘍に対する治療戦略

花澤 豊行

今日の鼻科学における外科的進歩は内視鏡下手術の登場により大きなパラダイムシフトが起こり、種々の手術支援機器の開発に後押しを受け目覚ましい進化を遂げて来た。内視鏡導入前の鼻科手術は複数の術者が共有して見ることでできない術野において執刀医の感覚だけを頼りに職人技のような手術が行われていたが、内視鏡下手術が導入されるようになると、裸眼では見ることの出来ない視角を要する場所でも執刀医以外も共有できる拡大された術野として明視下に置けるようになり、より安全な手術が行われるようになった。これにより従来は外切開で行われていた病変に対しても内視鏡下に、より低侵襲でかつ確実な手術が行われている。更に、光学的に操作部位の画像解像度が上がることで微小な構造物や微細な粘膜変化を捉えられるようになり、より正確な手術が提供できるようにもなった。これら様々な恩恵を受け解剖学的な手術適応の範囲も拡がり、内視鏡下手術は鼻副鼻腔領域から更に外方へと進み、翼口蓋窩、眼窩、そして頭蓋底・頭蓋内へと新たな領域への適応拡大を見せている。

一方で内視鏡下手術の限界や課題も徐々に明らかになって来ている。内視鏡下には確認はできても修復や切除にあたっては十分に操作できない部位や、通常は外切開でなければアプローチは不可能と考えられていた前頭洞前壁、眼窩外側および頭蓋内の病変においては、経眼窩、経頭蓋および経歯肉などの外切開を併施し、一病変に対して多角的なアプローチを組み込むことで確実な切除や修復が可能となることが数多く報告されるようになった。本講演においては、これら内視鏡下手術のメリットを新しい視点から十分に活用した鼻副鼻腔悪性腫瘍に対する治療方法について解説する。